

終に第七には、兎も角、傳記を現はすのにその中心人物が缺けてゐるので、之が作家を苦しめたが、何時迄でもその儘ではゐらないで、二方面の派成を試みたのである。一は、世尊の前生に屬するもので、他はその滅後に屬するものである。斯くて、世尊の生涯中から取つたもの、ある傍ら、一方には、本生譚があり、他方には、阿育王時に至るまで、分骨の如きに伴ふ事情を示してゐるものがある。

印度の最古代派について云ひ得る所は、現在では斯の如きものであると思ふ。而して之に關する出版も不十分な事として、印度以外には従つて知られる事が少い爲に、特に此の點を廣く考へたのであるが、この事情は、犍陀羅派や、更に降つて、中世印度諸派に於ては、幸にして同様ではない。次に之を簡單に述べておかう。

第八として前に續いて云へば、世尊の像を寫さないのを以て特徴とする古代派に對して、犍陀羅派には、其の製作の根本特徴に、佛陀の印度ギリシア風な像がある。同時に、其題材に於て、世尊の生涯を寫してゐる説話の場面